新刊紹介

『日ソ戦争 南樺太・千島の攻防 ～領土問題の起源を考える』

富田武（著）みすず書房 2022.7

第2次大戦末期に始まった日ソ戦争の最後の戦場となった南樺太・千島。そこでは、終戦の詔が出た8月15日以降も戦闘が続き、ソ連軍が千島占領を終えたのは、日本による降伏文書調印後の9月5日だった。本書は、南樺太・千島の攻防を総括的に論じた初めての著作だ。同著者による「日ソ戦争1945年8月～棄てられた兵士と居留民」（みすず書房、2020）の続編にあたる。

日本語、ロシア語、英語の多岐にわたる膨大な資料を読み込んでまとめられた本書には、二つの際立った特徴がある。まず、米ソ間の秘密外交や日ソの軍事作戦など、権力者の動きだけでなく、それに翻弄（ほんろう）される兵士や民間人の体験も描いたことだ。次に、抑留、引き揚げ、領土紛争など、戦争から派生して戦後に長期化した諸問題も取り上げたことだ。

秘密外交と軍民の悲惨な記録

北海道北部（留萌と釧路を結ぶ線の北側）の占領をソ連が断念する経緯や、太平洋への出口確保のためにクリル（千島）全島の領有を強引に押し進めるソ連の動きは、北方領土問題の起源の再考を促すものだ。

戦闘場面はすべて、日ソ双方の記録を突き合わせる形で提示されるので、客観的な戦況がわかる。南樺太の日本兵は、爆雷を抱えて敵戦車に飛び込む肉薄攻撃を命じられた。これとまったく同じ人命軽視の「肉攻」を、ソ連軍もまた北千島で日本軍相手に行ったことに驚かされる。

戦禍にある民間人の様子も、生々しく伝わってくる。南樺太には、逃避行を諦めて心中した母親と子ども5人の凄惨（せいさん）な姿がある。ソ連軍上陸に仰天して、必死に根室支庁に指示を仰ぐ南千島住民の多くは、結局ソ連軍の支配下に取り残された。その一方で、南樺太の過酷な収容所生活やソ連統治下の択捉島ですら、日本人とソ連人の間に友情や信頼が生まれることもあったという。

現在なおウクライナで続く戦争を思えば、本書が提起する問題は決して過去のものではない。戦争がいかに多くの禍根を残すか、今一度思い起こさずにはいられない。

（黒岩幸子、岩手県立大特命教授）

北海道新聞2022/9/4より再掲

かつての樺太、千島列島、そして北方四島は77年前にソ連に奪われ、すっかり過去の問題のように見られ、もうその事実さえ知らない世代が大半となっている。そんな時にロシアが隣国で同じスラブ民族のウクライナに突如侵攻した。差し迫った問題は何もないのに、勝手な妄想や嘘をデッチあげて侵攻したのだ。彼らは19世紀クリミヤ戦争で中東への出口確保を狙った侵略戦争が失敗に終わったことを忘れてはいないのだ。一週間もすれば終わると安易に考え侵攻を始めたが、九カ月たった今も終息の兆しは見えない。これは平和ボケの日本に覚醒を迫るようにもみえる。

この種の本はもう出ないと思っていたが、ロシアのウクライナ侵攻の最中、忘れ去られようとしていた矢先に警鐘のようなタイミングで出版された。元島民としては、あの樺太へのソ連の侵攻の悪夢が思い出された。ロシアのウクライナ侵攻の様子はソ連軍の樺太侵攻と全く同じ構図なのだ。

ソ連侵攻の悪夢～元樺太島民の視点

これをみて思い出すのは「日ソ中立条約」がありながらソ連がヤルタ会談に加わり、樺太、千島列島、北方四島の領有を密かに画策していたことだ。それに対し日本はその事実を知りながら無視して、愚かにもソ連に終戦への斡旋を依頼したのだから、ソ連がそれを見逃すはずはなかった。日本はソ連にすっかり弱みを握られていたのだ。

日ソ中立条約の締結からソ連参戦に至る推移をみると、日本がポツダム宣言を無条件で受諾した後もそれを無視し、国際法も無視して侵攻を続けたことは許されるものではない。ソ連も連合国の一国として宣言に加わった以上、米英と同じように日本の8月14日ポツダム宣言受諾で停戦すべきだったのだ。それを一切無視して無抵抗の樺太や他地域へ侵攻し続けたことは決して容認できない。もしそれが容認されるなら、日本にもソ連と同じ手法が許されることになる。

本書の特徴は日ロ双方の最新の資料を使って時系列で示したことで、従来のものより具体的で説得力がある。この侵略戦争に関する多くの資料の引用だけではなく、日本のスタンスを明確に示したことは類書にない点だ。こうしてあのソ連の侵攻の問題点を改めて浮かび上がらせてくれた。今後これ以上のものは出ないだろう。

改めて、ソ連の樺太侵攻やロシアのウクライナ侵攻は大きな教訓を与えてくれたことを銘記しておきたい。日本はこの侵攻を他所事ではなく我がこととして学ぶべきと考える。

（尾形芳秀、会員）